２００８年１２月１４日

人間科学研究科長殿

広瀬　美和氏　博士学位申請論文審査報告書

下記の審査委員会は、広瀬美和氏の学位申請論文について、人間科学研究科の委嘱を受けて審査をしてきましたが、２００８年１２月１１日に審査を終了しましたので、ここにその結果を報告します。

記

１．申請者氏名　　広瀬　美和

２．論文題名　　子どもの社会的葛藤解決行動の発達的研究

３．本文

（ａ）主旨

本論文は、保育園における子どものいざこざの解決過程を彼らの集団維持・発展のための社会的スキルとして位置づけ、従来の研究よりも広い時間・空間軸においてそれを検討することによって、子ども達の新たな行動方略とより積極的な適応性を指摘するとともに、縦断的手法を用いてその発達を根気強く追跡したものである。

（ｂ）概要

第１章では、保育園における自然観察から子どもの社会的葛藤解決行動を抽出しその現象の構造を明らかにする、また幼児期におけるそれらの行動の発達的変化を検討する、という本研究の目的が提示され、それに関連する先行研究がレビューされている。

これまで和解、葛藤解決行動の研究は、葛藤後に当事者がその場に留まった場合を対象として行われてきており、そのためいったん当事者同士が離れた後の葛藤解決の生起を過小評価してしまっていた可能性があること、和解や仲直りは、親和的・向社会的行動として研究が行われてきたため、子どもの葛藤解決研究は、謝罪や話し合いやルールの導入といった行動に限定されがちであったこと、子どもが泣いたり大人が介入した場合は、その時点をものわかれによるいざこざの終結とした

り、大人側からの介入として処理してきたこと、などの問題点をかかえていたという認識から、保育園での自然観察をふまえて観察データを文脈全体で質的に理解しようとするアプローチに基づき、子どもたちの集団がどのように葛藤を解決しているのかをより広い時空間軸において探るという主張へと導かれている。

第2章では、保育園での自然観察によって得られた葛藤エピソードをもとに、子どもたちの仲直り方略が考察されている。そこでは、劣位性をアピールして相手の攻撃を抑制する、大人の権威を利用する、他者を巻き込んで構造を変化させる、あるいは距離をとって緊張状態を解消するといった多様な方略の存在が明らかにされ、そこには当事者間の相互作用だけに留まらないダイナミックなやりとりの展開のあることが示されている。なかでも、緊張を緩和しいざこざの文脈を遊びに転換する「おどけ」「ふざけ」という行動方略の存在を指摘している点は興味深い。

第3章では、上述のような葛藤解決行動がどのように発達的変化を示すのかが3年間の縦断観察をもとに検討されている。その結果、方略の使用頻度の変化という以上に、子どもたちが方略の選択の際に拠りどころとする集団規範が変化していくことや、相手や周囲の意図を読み取る能力の変化、役割取得などの能力の獲得が、いざこざの展開や、解消の際の共感性に反映されていることが指摘されている。

第4章では、霊長類研究などにおいて和解の際に用いられ慰撫効果があるとされている身体接触が特に採り上げられ、その葛藤解決場面における意味が検討されている。子どもの葛藤解決においては、ただ慰撫のためだけでなく、自分の正当性を周囲にアピールするために身体接触が道具的に用いられ、また相手の怒りや緊張の状態を測るなどの道具としても用いられることが指摘されている。

第5章では、特にこれまで葛藤解決において積極的には注目されてこなかった「おどけ」行動や、「介入要請」「劣位性の表出」といった行動の葛藤解決における意味が検討され、それらが解決法略として適用しうる可能性について探索されている。おどけなどのユーモアが成立することは、意図や「ふり」を理解するなど心の理論の成立に基づいているものであり、おどけが用いられるということも幼児における社会的な発達過程であると推察されている。また順位枠組みそのものも子ども達の間で共有され、集団を支える基軸の一つとなっていることが論じられている。

第6章では予備的研究として英国のEdinburgh市の保育園で観察を行い、日本の保育環境との比較研究を行う意味が探索的に検討され、さらに総合論議では、あらためて自然場面から、子どもの示す集団規範や意図のやりとりなどの質的な変化を記述することの意義が論じられた。本研究で指摘された子どもの行動には、従来から指摘されてきた社会的カテゴリや社会的規則といったコンピテンスや、心の理論、

あるいはメタ・コミュニケーション、役割取得といった社会的、認知的な能力が関係しており、社会的葛藤やその解決方略の発達とは、それらの能力の獲得過程でもあるということが論じられている。

（ｃ）評価

本研究は、３歳以上の保育園児集団におけるいざこざの調整について、従来の研究を丹念に踏査し、それらを建設的に批判した上で枠組みを時空間的に拡大し、これまであまり注目されてこなかったさまざまな行動方略に新たな光を当てることに成功している。「身体接触」がもつ多様な機能が明らかにされたことがその例であるし、また「おどけ」のユーモアが果たす役割や、あるいは「先生」という権威を取り込むことで相手を威圧する方略などについての言及も然りである。そうして単にトラブルの収束にとどまらず、そのトラブルを契機として遊びにまで昇華させてしまう子ども達の逞しい能動性を鋭く指摘している。

そしてそのような子どもの社会性が年齢とともに発達する様を記述することに成功しており、それをさまざまな既存の発達理論と連結させることで、包括的な社会的発達のモデルを導出することにつながる、ボトムアップ型の仮説定立的な研究となっている。それらを説得力あるものたらしめたのは、本研究の根気強い縦断的なフィールドワークと先入観にとらわれない目である。本研究の事例数が十分とはいえないことはこういう研テーマと手法にともなうある種の必然であるし、取り扱われた年齢幅にも制約はあるが、それらによる問題を差し引いたとしても、今後の一層の発展が期待される優れた研究といえる。

以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）にふさわしい研究であると判断する。

４．広瀬　美和氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員　早稲田大学　教授　博士（人間科学）（大阪大学）　根ヶ山光一
審査員　早稲田大学　教授　博士（人間科学）（早稲田大学）蔵持不三也
審査員　早稲田大学　教授　博士（人間科学）（早稲田大学）鈴木　晶夫
審査員　早稲田大学　教授　教育学博士（北京師範大学）　山本登志哉